資料６－１

知床五湖園地でのヒグマの安全管理対策について

短期的な取組（R8年度中）

観点	課題点	対応の方向性	No.	期	詳細	検討の観点	備考	実施主体(仮)	優先度	資料
施設管理	日没後の退出の常態化 ヒグマ活動期及びヒグマの出没頻度が高い際の閉鎖・解放基準が不明確	開閉園の運用方法の改善	短-1	植・ヒ	両期・両ループの最終レクチャー時間等の変更を行う	五湖の運用や安全性の面から、日没・閉館時間や危急時対応等を考慮し、最終レクチャー時間の前倒しを検討	利用機会の確保、利用者数の維持、利用時間帯の平準化の観点からも検討する必要がある。利用者に分かりやすい時間設定とする必要がある。	あり方協議会・審査部会	高	資料5「2026年度 知床五湖の運用計画」
			短-2	植・ヒ	ヒグマ遭遇時等のツアーの継続と中止及び閉鎖と開放（再開）の対応方針の改善及び明確化を検討する。	植生保護期とヒグマ活動期で分けて検討。 植生保護期は既存の対応方針を中心に再検討。 ヒグマ活動期はシーズン中研修（ケーススタディ）とも連携した、基準設定を目指す。	ヒグマ管理計画でのゾーニング「特定管理地」での「利用者/施設管理」への反映が必要な可能性がある。 ヒグマ活動期ハンドブックへの掲載が必要か。（短-7）の臨時巡視も考慮する。	あり方協議会・審査部会		資料6-2「地上遊歩道の閉鎖判断基準（案）」（環境省）
施設管理	見通しの悪い区間の歩道環境整備の実施体制が不明確	歩道環境整備体制の明確化	短-3	植・ヒ	見通しが悪い地点の支障木伐採・笹(草)刈り及び春季除雪の体制の明確化を行う	笹(草)刈りについては、持続可能な体制を検討する必要がある。 付随して、春季除雪についても、現状の「管理者＋登録引率者（ボランティア）」の体制について改めて関係者間で協議する。	これまで草刈りについては自然公園財団にてボランティアで実施していた経緯があり、来年度以降の実施体制の明確化が急務。昨年度の議論で笹刈り実施の重要性が話されたが、議論が進んでいなかった。	環境省・北海道・自然公園財団・登録引率者	高	資料6-3「地上遊歩道での環境整備について」
情報提供・利用者管理	多言語対応が不十分。映像・画面構成等の面で注意事項が十分に伝わっていない	レクチャー映像改修及びレクチャー運用方法の検討	短-4	植・ヒ	レクチャー映像改修及びレクチャー運用方法を検討する	ヒグマ遭遇時に一人一人の利用者が自ら行動ができることを目的として、分かりやすくて現実味のある構成・演出が求められる。多言語対応、レクチャー映像に伴う口頭説明の内容の再検討も必要。	R7に知床財団に環境省から発注している業務で原案作成を行う。既に登録引率者等には意見聴取済み。 環境省にてR8に映像作成と機器の更新を行うことを想定し、R9年度以降の供用を目指す。	環境省・知床財団・登録引率者	高	資料6-4「レクチャー映像の改修について」
引率者教育・危急時対応	ガイド事業者のヒグマの安全管理に関する研修やヒグマ・対人対応にかかる定期的な訓練の不十分（ヒグマと遭遇しないためだけでなく、ヒグマとの遭遇・事故を見越した研修が求められる。）	危急時対応に係る研修の改善	短-5	ヒ	クマ遭遇時対応（クマスプレー・無線等）等危急時対応訓練の追加及びシーズン前・シーズン中研修（ケーススタディ）及びヒグマ遭遇時の判断基準のすり合わせ等のアップデートを検討・試行する	当該訓練・研修の登録引率者研修内外での位置づけ、持続可能な実施主体や実施方法を検討する。 シーズン前研修については、主に無線訓練と搬送訓練について、実践に即した内容を試行する シーズン中研修については、既存の事例選定方法や復習方法、研修様式等について、より実践的で実のある研修となるよう、ガイド事業者へ意見聴取しつつ試行する。	毎年度訓練を受けることは、各者の負担やマンネリ化の面で好ましくない。サイクル（3年に1度等）で毎年15人ずつ程度で行うか。 シーズン前研修については、危急時対応をする可能性がある両財団の参加も検討する。 五湖での様々な課題を抽出・議論するための仕組みづくりについても併せて検討したい。	環境省・知床財団・登録引率者	高	資料6-5「登録引率者研修のカリキュラム改善について」（環境省・（登録引率者代表））
ヒグマ管理	ヒグマの出没の可能性が高い時期の安全確認が不十分。 確実性と即時性を持ったヒグマの状況把握が必要。ヒグマアンケートへの回答が徹底できておらず、ヒグマとの遭遇があってもその情報が共有されない。	歩道巡視の実施	短-7	植(夏)	とりわけ、植生保護期（夏）について、週1～月１回程度の定期巡視とヒグマの遭遇が多い時期の臨時巡視について、その方法や体制を検討し試行する	これまで以上の強度で安全管理対策を行うことを念頭に,持続可能な巡視体制、巡視で確認するチェック項目等も併せて検討。臨時巡視を開園前に行うか。	定期的な巡視は施設管理（歩道破損・倒木）、マナー啓発、利用者状況調査を含む。植生保護期(春)はヒグマの出没が少なく、ヒグマ活動期はガイド同行必須のため、植生保護期(夏)と比較して優先順位は下がる。	環境省・北海道・知床財団・自然公園財団	中	資料6-6「植生保護期の巡視の試行について」（環境省・知床財団・自然公園財団）
		利用者からの五湖園地及び周辺のヒグマ関連情報の収集	短-8	植	ヒグマ目撃報告への協力の周知を徹底する。	高架木道出口への看板の設置を検討 レクチャー映像や口頭説明の内容の再検討（レクチャーの改修（短-4）と併せて検討）	ヒグマ情報の整理の効率化（長-6）も考慮に入れる必要がある。	環境省・知床財団	低	（資料４「知床五湖高架木道の再整備について」）
情報提供	レクチャーだけではヒグマの出没しやすい地点が現実味を持って伝わっていない	歩道上での情報提供・注意喚起	短-9	植	遊歩道上のヒグマが出没しやすい・した区間への一時的な注意看板の設置※即時的かつ現実味のある情報提供を行う。	看板設置の基準については、閉鎖・開放基準（短-2）と併せて検討する必要がある。また設置体制については、植生保護期の巡視体制(短-7)と併せて検討。	当該看板（及びアニマルコードの標柱）の製作はR7年度中に環境省が行う。景観への配慮も必要。	環境省・知床財団	低	資料6-3「地上遊歩道での環境整備について」
利用者管理	ヒグマ活動期における合流地点以降の混雑、ヒグマ連続遭遇の危険性の低減が必要	ヒグマ活動期での各地点の出発時間の遵守	短-10	ヒ	現在設定されている各地点の通過目安時間や出発時間の再検討、及びそれらの徹底	大ループは合流地点前まで、小ループは全体を通してややタイトなスケジュールとなっている。小ループ試行枠での議論と並行して進める必要がある。	ヒグマ活動期ハンドブックの改定が必要。 出発時間の徹底に向けた取り組みも進める必要あり。	登録引率者	低	資料6-7「ヒグマ活動期ツアーでの各地点の出発時間の変更について」

中長期的な取組（数年以内）

観点	課題点	対策項目	No.	期	詳細	検討の観点	備考	実施主体(仮)	優先度
施設管理	ヒグマの行動や個体数等の変化に伴い、植生保護期の安全性の確保が相対的に不十分	植生保護期の運用方法の検討	長-1	植	植生保護期の運用方法として、植生保護期の安全管理方針や開始日の後倒し（ヒグマ活動期の延長）の検討	これまで以上の強度で安全管理対策を行うことを念頭に、昨年度の議論を拡張させ、特に植生保護期における五湖でのヒグマ対策のあり方や対応方針及び植生保護期の期間や３期制のあり方について、検討・議論する。	植生保護期における登録引率者の役割整理が必要。 また利用者やガイド事業者の増加、利用者の多様化等の近年の利用動向を捉えた、五湖での利用のあり方全体についても併せて検討する必要あり。 五湖での様々な課題を抽出・議論するための仕組みづくりも併せて検討したい。	あり方協議会	高
危急時対応	ヒグマ等によるトラブル発生時の対応について、知床全体での方針を、知床五湖での方針に落とし込む必要がある。	トラブル発生時の対応方法の更新	長-2	ヒ(・植)	ヒグマ活動期ハンドブック「第２章 トラブル発生時の対応マニュアル 」の内容の検討及び更新。	ヒグマ対策連絡会議で決定する、R8年度以降の知床における、緊急時対応マニュアルの変更に準じて更新 閉鎖基準の改定（短-2）と併せて検討。	ヒグマ活動期ハンドブックの改定が必要。 植生保護期のトラブル発生時の対応も明確化する必要あり。	あり方協議会・知床財団・斜里町・環境省	高
引率者教育	制度開始から時間が経ち、個人ガイド・地域外からのガイドの増加や、ヒグマの遭遇事例の増加といった変化に対応した研修への改修が必要。研修開始から時間が経つが、フォローアップ研修が出来ていない	登録引率者の研修のあり方の改善	長-3	植・ヒ	安全管理上重要だが抜けがちな部分（ガイドの役割や責任、登録引率者として求められる姿勢や意識等）に関する研修や、経験の浅い引率者を中心にガイディング技術を向上させるための実地研修等を検討。	危急時対応に係る研修の改善（短-5）や引率者への意見聴取を通して、既存の研修内容の整理を行う。その上で必要な研修内容を抽出し、登録引率者研修内外での位置づけや整合性、持続可能な実施主体や実施方法について、検討する。	五湖においてどのような安全対策を行うのか、その上でどのような能力をガイドに求めるのかをまず議論する必要がある。知床全体での、ガイド事業者の安全意識向上にも寄与することも目的の一つ。 五湖での様々な課題を抽出・議論するための仕組みづくりについても併せて検討したい。		中
情報提供	利用者の来訪前のリスク認知や、リスク了承の仕組みが不十分（自発的なリスク低減の行動が促せていない）	リスクの認知に向けた情報提供・注意喚起の検討	長-4	植・ヒ	多様な情報媒体を用いた、知床五湖及びヒグマのリスクに関する情報の複層的で効率的な周知体制の再検討	計画段階、予約段階、来訪段階等複層的な情報発信が必要	ヒグマ対策連絡会議で決定する、R8年度以降の知床における、クマの情報提供・注意喚起の体制・体系の変更に準じて対応	環境省・知床財団	中
		リスク了承に向けたシステムの構築	長-5	植・ヒ	リスク了承を促すための宣誓書（署名）、チェック表等の導入の検討	利用者のリスク了承を促すために、予約時や来訪時の追加的なシステムの導入（利用申請書への追加、予約の際の事前回答等）を検討 リスクの認知に向けた情報発信（長-4）と併せて検討	免責同意書も検討したいが、実際に機能させるのは難しい。		低
ヒグマ管理	ヒグマの行動に関する情報がアンケート・CSシートに限られている、ヒグマ情報の関係者間での共有が非効率、植生保護期に利用者へ即時性のある情報提供が出来てない	五湖モニタリング計画の改定	長-6	植・ヒ	五湖モニタリング計画のうち、「ヒグマの行動と遭遇状況」の調査項目の再検討	アンケートでの遭遇情報の収集に加えて、巡視等での積極的な情報収集の必要性を再検討する。 五湖でのヒグマの人なれに関する情報収集方法も併せて検討する。	持続可能な調査体制の構築が必要。遊歩道の巡視（短-6）と連携して検討。 ヒグマWG等の専門家に意見聴取が必要。		中
			長-7	植・ヒ	ヒグマに関する情報の整理及び関係者間での情報共有の効率化の検討	効率化として、即時性・確実性の向上や省力化を目指してGIS等を用いたDX化を検討。将来的には、アプリ等を用いた遊歩道利用者への情報提供も検討。 またドローン等を用いた巡視のIOT化も検討。	ヒグマ対策連絡会議で決定する、R8年度以降の知床における、クマの情報提供・注意喚起の体制・体系の変更に準じて対応。		低